人体改造博物館３　―後編―

「うんちの感覚はどうかな？」
手術から三か月。アナルプラグの大きさはすでに十一センチとなった。そのプラグをずっと咥えたまま、そして排便も全て腸内洗浄機に頼ってきたせいで、もう便意はよく分からなくなってしまっていた。
「ないです……わかんない……」
「じゃあそろそろ出す練習もしようね」
それを聞いて、ついに来た、と思った。体内のジュースを溢さないようにグラスに出す――それはジューサーとしての大事な役割の一つだ。けれどまだ一度もその練習はしていない。本当はお金のためにも早くしたかったけれど、週に三日のお見舞いは続けていたので他の練習と並行してする時間がなかったということもある。
「じゃあ、まずはお尻の中を綺麗にしよう。研修部屋に行こうね」
「ん……あの、抱っこ……」
教わったのは大きなバイブの咥え方だけじゃない。甘え方も甘やかされ方も我儘もぐずり方も教えてもらった。
だからこうして手を伸ばせば、飯田は嬉しそうな顔で手を伸ばしてくれる。
「おいで」
ぎゅっと首に縋りつけば浮かぶ身体。力強い腕に身を任せて下ろされるのを待つ。
「ほら」
「ん……」
洗浄の定位置に着き、ありがとう、と言えば優しく下ろされる。そして、四つん這いになって自らズボンと下着をずり下ろしてアナルを曝す。
「いいこ。ちゃんと自分でお尻を出せたね」
「はい……お尻綺麗に洗ってください」
そのままじっと待てば、後ろでかちゃかちゃと音が聞こえる。腸内洗浄機の準備だ。そして音が止むと、アナルのプラグが抜かれた。
「んっ……」
「大きいね……苦しい？」
「んん……きもち……」
大きいものを出す。いや、出すというよりもはまっていたものを抜かれるだけなのだけれど、それだけでもう快感を学んだアナルは気持ち良くなれる。
「いいこ……お尻でもっともっと気持ち良くなれるようになろうね」
もう数えきれないほど何度もされた洗浄。お湯が入って、そして吸われてを繰り返す。けれど今日はすんなりとは終わらなかった。
「このまましばらく待つよ」
「え……？」

確かに吸引の前はお腹がたぷたぷの状態で時間を置かれる。でも普段は三回もすれば終わるのに、今日はその後があった。
「お尻の中の臭いとばい菌をなくすお薬だよ。展示品になったら毎朝これでお腹の中をしっかりと綺麗にするんだ」
「あ……」
そうか。どうして今まで気付かなかったのだろう。今思えば博物館で飲んだジュースに便の臭いはついていなかった。アナルを開いたときも、バイブを取り出したときも、便の臭いを思い出すことすらなかったのだ。
「苦しいけど、このまま十分我慢だよ」
「あ……そんなに……？」
週一で行われている腸内洗浄での待ち時間はせいぜい二、三分だ。それだけでもすごく苦しいのに。
「そうだよ。でも我慢している間もちゃんと近くにいるからね。準備のときから箱の中で一人きりというわけじゃないんだよ」
「あ……そうなの……？」
「そうだよ。お尻の準備をちゃんと終えて、それから箱に入るんだ。それは開館時間の直前だし、終わったら一番に箱から出すよ。だから大丈夫」
「嬉しい……よかった。ずっと一緒がいい」
「うん。それに箱の中にいる時間だって俺はすぐそばにいるから。大丈夫。怖くないよ」
「ん」
嬉しい。心がぽかぽかする。でも、お腹はぎゅるぎゅると痛む。
「うぅ……」
「痛いね……」
どうやらお腹の悲鳴は飯田の耳にまで届いていたらしい。薬剤の混ざった水分で垂れたお腹をそっと撫でられる。
「あっ……」
「ん？」
飯田の指が偶然臍に触れた。その瞬間、ペニスが反応する。
「……ここ？」
「あっ、だめっ」
飯田は敏い。すぐに気付いて感じ方の違う場所を何度も撫でる。
「あっ、やぁっ……」
「……律はお臍でも気持ち良くなれちゃうんだね。じゃあ今夜のお風呂の後はお臍を掃除しようか」
「あ……麻斗さんが……？」
「他に誰がいるの？」
今まではこそっと自分でやっていた。保湿クリームをつけた綿棒で汚れを取っていたのだけれど。
「今度から俺がするからね。それで勃起しちゃってもかまわないから」

「ぁ……ほんとに……？」
自分でしていて勃起したことはない。むしろぐりぐりとやり過ぎて下腹部が痛んだことがあるくらい。でもきっと、勃起してしまうだろう。
「うん、ホント。掃除しているだけで可愛くなっちゃうところが見たいから、裸のままでしようね」
「あ……」
確かにお風呂上がりなら裸でもおかしくない――多分。
「……まだ五分か。あと五分頑張れるかな」
「あ……まだ……？」
話していればそれなりに時間が経つのは早いような気がするけれど、実際に時計を意識してしまうと針の進みはひどく遅く感じられる。つらい。
「こんなに長時間我慢するのは初めてだし、今日はこのくらいにして徐々に慣れていこうか」
「あ……でも……」
そうしてほしいと思うけれど、でもせっかく薬剤が入った水分を使ってもらっているのだ。本当に十分で綺麗になるのか確かめてほしい。
「……このまま……でも手、握っててほしいです」
「うん、じゃあぎゅってしていようね」
そのまま飯田は手を握り、そして空いた手でお腹を擦っていてくれた。
「あっ……うぅぅ……」
苦しい。痛みがきつい。冷や汗がこめかみを伝った。
「……苦しいね。でも何度かしているうちに慣れてくるから……」
「はい……」
苦しい。けれど大丈夫。だって智樹はこれ以上の痛みを手術の度に味わっているのだ。それに律にはこうして隣にいてくれて、汗までも舐め取ってくれる優しい恋人がいる。
「う……あと……何分……？」
「あと三分……頑張れる？」
「ん……頑張る……」
「……律はすごいね。頑張り屋さんだね」
「あ……麻斗さん……」
心が折れそうになる。このまま飯田の胸に飛び込んでしまいたい。そして「お腹が苦しいからお水出させて」と言ってしまいたくなる。でも智樹のため――最初はそれだけだったのに、今は飯田のため、とも思っている。飯田が仕事で誇れるように。だって飯田の評価は展示品の人気や仕事ぶりによっても左右されるだろうから。
「お腹苦しいね……でもちゃんと楽になれるからね。時間が経ては機械がお腹の中を吸い取ってくれるから。もう洗浄機のホースも太いものになってるし、きっとすぐになくなるよ」
「あ……」
そうだ。この腸内洗浄機のホースだってアナルの拡張に合せてサイズを変えているのだ。最初は細いも

のだったけれど、今は太い。通常では見ないホースの太さになっている。
「あぁもうすぐだよ。あと三十秒。よく頑張ったね」
「ン……」
頬を撫でる優しい手の感触に目を細める。この甘やかしはすごく好き。頑張って良かったと思える。と言ってもただ耐えるだけなのだけれど。だってホースが入っているから出したくても出せないし、自分でホースを抜くこともできない。
「……よし、もうお腹楽になるからね……」
「ああっ！」
言葉と同じタイミングで機械が吸引を始めた。吸われる感覚は、ホースが太くなるほど強くなっているような気がする。
「あああああっ！　すごいっ」
「……気持ち良さそう。お尻の中吸われるの気持ちいいね」
「ああんっ！　きもちっ……ああ……あああぁ……」
終わってしまった。気持ちいい時間は長く続いてほしいと思うのに、一瞬のように感じてしまう。
「ふふ、そんな悲しそうな顔しないで。さあ、お尻の中の匂いを確認するよ」
「えっ」
まさかと思った。でも四つん這いのまま動くことはできない。だって、許可されていないから。
「大丈夫、恥ずかしくないよ。うんちの処理だって俺がしてるんだから」
それとこれとは違う。だって、直腸の匂いを嗅がれるなんて。
嫌々と言いながら、それでもちょっと興奮している自分もいた。飯田が「いいんだよ」と言ってくれるのに甘えてそのまま待つ。
「さあホースを抜くよ」
太いホースはずるっと抜けた。開くものがなくなったアナルは自然と閉じていくけれど、それでもひくひくしてしまう。だって足りない。
「可愛い。お尻パクパクしてる。すぐに食べさせてあげるからね」
ちゅ、という可愛らしい音を立てて、飯田はお尻にキスをくれた。嬉しいな、と思っているとアナルに肛門鏡が入れられる。
「うん、中、すごく綺麗。それに簡単に開くようになったね」
「あ……お尻……開いてる……？」
「うん、ちゃんとお口開けてるよ。大きなお口。律の顔にあるお口よりも大きく開いてる」
「ぁん……やぁ……」
飯田がすっとアナルを撫でた。開かれたそこはパツパツに張っているせいか余計に敏感になっている。
「じゃあ確認するね。まずはカメラから」
「あっ……」
恥ずかしい。でも嬉しい。カメラを入れて、中を確認してもらえる。
アナルは大きく開いているし、カメラはそれほど大きなものではない。だから何かが入ってくる感触と

いうものは感じないけれど、近くに設置されたモニターには画像が映る。
「ほらちゃんと見てごらん。律のお尻の穴、大きくなったでしょう」
「やああっ！」
てっきりもう中に入っていると思っていた。なのにカメラはまだ外にあって、しかも律がお尻を突き出しているところを映していた。
「やだぁっ」
「可愛いよ。俺はいつもこんな可愛い姿を見てるの。いいでしょう」
「やっ、よくないっ」
楽しいと思えるのは飯田だからだ。自分がお尻を突き出し、アナルを開いてもらっているところなんて絶対に見たくない。
「可愛いね。でも仕事中もこうしてお尻を撮られちゃうんだよ。それを観ながら過ごすんだから、見られるだけじゃなく観るのにも慣れておこうね」
「やぁ……」
確かに箱の中にはモニターが設置されているらしいけれど、実際には展示品は自分のアナルの中を見る必要などない。これは想像だけれど、自分の内部を見ることで興奮を高め、勝手にひくつくアナルを曝すことでお客さんの気分を高める効果を狙ったものだろう――と思っている。
「ほら、皺が一本もないでしょう。すごくよく伸びてるよ」
「やだぁっ……見ないで……」
アナルの縁に近付くカメラ。どんどんどんどん近くなる。そして――。
「あっ」
ツン、とカメラがアナルの縁を突いた。それだけで気持ち良くなってしまう。
「敏感だなぁ……でもなるべく動かないようにする練習もしないとね。排出や停止を求める合図の度にお尻をびくびくさせることになっちゃうから」
「アアッ……ごめっ……」
「いいよ。大丈夫。そのための準備期間だからね。しっかり練習して立派な展示品になろうね」
「ん……僕のこと、ちゃんと躾けてください……」
「……可愛い……もう……やばいな。興奮する」

〜〜〜〜

それからもう一度肛門鏡でアナルを開かれ、中にバナナが入れられた。
「あっ……」
「敏感だね。今一本入れたよ。次はバイブ」
「はい」
「まずは細いのでいくから」
ドキドキする。だってバイブでアナルをぐちゃぐちゃに掻き回されるのだ。

「あ……」
肛門鏡が抜かれ、そして入れられたバイブ。確かに細い。細くてちょっと物足りない。
「ぐりぐりするね」
「はい……あっ……ん……」
気持ちいい。でも射精に繋がるほどの快感ではなかった。
「物足りなさそうだね。でも今は気持ち良くなる練習じゃなくて、バナナを潰されるのに慣れる練習だからね」
「はい……」
ぐりぐりとバイブが回され、そして抜かれる。肛門鏡が入れられて、中にカメラが入ってきた。
「あ……すごい……」
「見える？」
「はい……」
自分の内部を見るのはすごく恥ずかしかったはずなのに、今はもう目が離せなかった。だって画面の中にはぐちゃぐちゃに潰れてとろとろになったバナナが映っているのだ。
「すごいね。初めてなのに上手にバナナを潰せたよ」
それは律がすごいのではない。単に飯田が上手だっただけだ。でも褒めてもらえてすごく嬉しい。
「じゃあ、今度はこれを出してみよう。ちょっとだけ牛乳を入れるよ。それからバイブでまた混ぜるから」
「はい……」
ということは、もしかして飯田が飲むのだろうか。だってただ出す練習なら水でもいいはずだ。
「……あの……」
「ん？」
「あ、麻斗さんが……飲むんですか」
「飲むよ。だって記念すべき初めてのジューサーでしょう。でも飲めるかどうかは律次第かな」
「え？」
「上手にゆっくり出せなかったら飲めないから」
「あ……そっか……」
確かに水下痢のようにブハッと出してしまったらそのまま散乱してしまう。でもそれだけではない。こんな体勢のままそんなことになったら飯田の身体を汚してしまうことになる。
「頑張ろうね。あまりたくさんは入れないから、腹痛はないよ。でも冷たい牛乳だから痛いかな……」
「ん……大丈夫です……」
展示品になったら氷まで使われることがあるのだ。必ず使われるとは限らないけれど、夏場なんかはきっと使われることが多くなるだろう。
「律は本当に頑張り屋さんだね。大好きだよ」
「あ……ああっ……あああっ！」
ゆっくりと入ってくる冷たい水分。けれどやはりそれほどの苦痛を感じないのは量が少ないからだろうか。

「よし。じゃあバイブで混ぜるからね」
「はい……」
この混ぜるバイブが飯田のペニスだったらいいのに――ついそう思ってしまうけれど、もし飯田の立場だったら絶対に嫌だろう。自分のペニスで混ぜたものを口にするなんて。
「あっ、あっ！」
「気持ち良さそう……才能があるね」
「やぁっ」
これは飯田だからだ。相手が飯田だから気持ちいいだけ。そう思うのに、口が塞がらない。
「あああああっ！　ああ！」
「……よし。これくらいかな。じゃあグラスを添えておくからゆっくりと出してごらん」
「ん……」
飯田が何かを操作した。すると身体を乗せていた台が少しだけ傾きを作り腰が下がっていく。
「これくらいかな。本当の箱でもこれくらいの角度があるから。さあ、出してみて。初めてだから失敗してしまっても大丈夫だよ」
「はい……」
ゆっくりとアナルに力を入れる。でも、なぜか出し方が分からない。
「……あれ？」
「……垂れてるよ。ぽたぽたしてるけど……出てないよ」
「うん……あの……出し方が分かりません……」
「あぁ……そっか、ずっとお腹を洗ってたからいきみ方を忘れちゃったかな」
コト、という物を置く音がした。きっと飯田がグラスを置いたのだろう。台が斜めになっているせいで後ろを振り返ることはできないけれど、何となく想像はつく。
「……可愛いなぁ」
「え？」
「赤ちゃんでも教わらずにうんちができるのに、律はそれさえもできなくなっちゃったんだなって」
「やっ……」
でも分からないものは分からないのだ。それとも拡張のせいで括約筋がダメになってしまったのだろうか。
「ふふ、大丈夫だよ。律はちゃんと出せるようなるから。手伝ってあげるね」
「え？　あ、ああああ！」
アナルに触れた柔らかい感触。口だとすぐに分かった。それに舌も触れている。
「やああ！」
れろ、と舐められた後で感じた吸引。吸われている。アナルを。
「やああっ！」
嫌なのに、飯田は止めてくれない。お尻を割り開き、アナルを啜っている。

〜〜〜〜

イきたい。今イったばかりだというのにまだイきたい。もうイきたい。イき足りないもっとイきたい。

「イきたいっ！　イきたいいいっ！」

「こら。違うでしょ」

「あああああっ！」

言葉を間違えたからだろうか。ローターの振動の強さが上がった。

「ああっ！　搾って！　おちんちんミルク搾ってえええええっ！」

イきたいという言葉しか浮かばない。いや言葉すら浮かんでいないかもしれない。自分の思考がもう、よく分からない。とにかく出したい気持ち良くなりたい絶頂したい。

「そうだね、律はもうイきたいって言うんじゃないよね、搾ってって言わないといけないんだよね」

「ごめんなざいいいいいい！　搾ってえええええ！」

手は使える。だから自分でそこに手を伸ばせばいい。そのはずなのに、それができない。だって、そこはもう飯田のもの。

「うん、いいこ。ちゃんとおねだりできたから律のミルク搾ってあげる」

「ああああああああああああ！」

飯田の手がペニスを握った。その瞬間、ビクビクとペニスが脈を打つ。でも何も出せない。だって、極太ブジーが入ったままなのだ。

「やあああああ！　ミルクうううううう！」

「ふふ、可愛い。もうおちんちんの穴で異物を咥える感覚に慣れちゃってるんだね。ブジーが入ってたの忘れてた？」

「ああああああああああああああ！　抜いてえええええ！」

出したいのに、せっかく飯田に握ってもらったのに精液を出すことができない。出したい。イきたい。ペニスが壊れてしまう。

「おねだり上手。とっても可愛い。じゃあブジー抜いてあげるね。何色のが出てくるのかな？」

飯田がブジーをゆっくりと引っ張る。ずるずると、やはり穴に対して太すぎるそれは表面が粘膜を巻き込むようにして動いていく。

「ああああああああああああああ！」

気持ちいい。

「ずぽずぽしてえええ！」

「ん？　抜かなくていいの？　おしっこの穴ずぽずぽされる方がいい？」

「ああああああああああ！」

飯田が楽しそうに笑いながらブジーを抜き差しする。その間も当然ローターは震えたままで、ブジーが前立腺を突く度に意識が遠のくような刺激を受ける。

「ああああああああああああ！　ごわれるうううううう！」

もうダメ、おかしくなってしまう。

「……そろそろいいかな……」
「あああああああああ！」
媚肉を巻き込みながら飯田がずぼっとブジーを引き抜いた。同時に駆け上がる快感。いや、もしかしたら尿道はブジーが抜けるのを、精液が出たと勘違いしたのかもしれない。とにかく感覚としてはイきっぱなし・出しっぱなしだった。
「あああああああああああああああああああああああああ！」
「すごい……タマタマとおちんちんぶるぶるさせながら白いのお漏らししてるよ……すごい……」
「あああああああああ！　あああああ！」
何が出ているのか分からないけれど、とにかく出るのが止まらなかった。苦しいほどの排泄。いや、射精なのだろうか。
「……聞こえてる？　すごくたくさん出てるよ。……止まらないな、大丈夫？」
「あああああああああああ！」
身体が痙攣している感じがする。イった瞬間の激しい快感がずっと続いているような感覚。
「あああああああああああああ！　あああああああああ！」
「すごい……可愛い……」
おかしくなる。開きっぱなしで顎が痛い。でも悲鳴が止まらない。
「律、愛してる。可愛い……こんなに可愛くて、こんなに敏感で本当に展示品になれるのかな」
「あああああああああああ！」
止まらない絶頂。もうつらい。何が出ているのか分からないし、そもそも今もまだ出ているのだろうか。出ているような感覚が続いているだけなのだろうか。何も分からない。ただ分かるのは、いつの間にか飯田に抱きしめられていて、けれど陰嚢の震えは止めてもらえていないということだ。
「あああああああ！　どめでえええええ！」
「ん？」
「やあああ！　ブルブルうううううう！」

〜〜〜〜

「じゃあ、タマタマに点滴を刺すからね。あ、狭山、口」
「はい」
一体何なのだろう。口とは一体。怖い。でも飯田を見上げることしかできない。
「律……可愛い。怯えてる顔も可愛いなんてずるいな」
怯えさせている本人が何を言うのだろう。でも一緒にいてくれるのは嬉しかった。
「律くん、お口を開けてくださいね」
おずおずと口を開ける。もしここが家で、相手が飯田だったら嫌だと首を振っただろう。でもここは病院だ。それに場所は違えど大切な弟もこうして医師や看護師にお世話になっている。そう思うと我儘を言って迷惑を掛けることはできなかった。

「あ……」
「いいこですね。舌を噛んでしまったら危ないので、ボールギャグを噛ませますよ」
（うそ……）
そこまでの痛みなのだろうか。舌を噛んでしまうほどの。
（怖い……）
でも、やはり逃げるわけにはいかなかった。物理的に逃げられないというのもあったけれど、すでにここまで準備をしてもらっていては今更無理ですなんて言えない。
口に穴の開いた軽いボールが入れられて、後頭部を通したベルトで固定される。穴があるので呼吸はできるが口を閉じることはできないし、だからもう当然言葉を発することもできない。手足も拘束されているので、もうされるがままになるしかなかった。
「先生、できました」
「うん、じゃあ始めます」
陰嚢に冷たいものが触れた。すでに一度経験したことがあったので、消毒されたのだとすぐに分かる。
「ううっ！　うううっ！」
「律……おてて握っていようね」
「ううう！」
どうして飯田はやっぱりやめますと言ってくれないのだろう。
（……本当にたくさん出すところ見たいんだ……）
普段の飯田なら本当につらいことはしない。無理なら無理と言っていいと言ってくれる。でも今言わないということは、本気なのだ。本気の、飯田の願望。
医師の手に力が入った。ぷり、と陰嚢の一部が押し出されるような感覚。中身が押し出されるような。そして、鋭い痛み――。
「うぐうううううううううう！」
「……痛いね」
手足に力が入る。腹筋も痛い。けれど少しも動けない。いつの間にやら腰の辺りも拘束されていたようだ。
「もう片方もするよ」
「うううううううううううううう！」
目がチカチカした。痛い。激痛という言葉では足りないような痛み。逃げたい。もうやめてほしい。消えたい。もうこんな痛みには耐えられない。
「うううううううううう！」
でもその痛みを訴えることすらできない。逃げるのも、叫ぶのも、何も。
「……よし。これでいい。点滴の時間は一時間くらいかな……つらいけど頑張ろうね」
「ありがとうございます」
こんなひどい痛みを与えた人に、どうして飯田は頭を下げるのだろう。信じられない思いで飯田を見ていると、飯田がふっと笑った。

「可愛い……それに綺麗だよ。律の涙はいつも綺麗だ」
「ぐふうううううううううううううう！」
仰向けのせいで唾液が喉奥に溜まる。必死に飲み込むけれど、次から次へとひっきりなしに分泌され、苦しい。それに手足も痛い。ベルトが食い込む。柔らかい素材のようなのにかなりしっかりと縛られてしまっているようだ。
「ではまた後で見に来ますので」
「はい」
医師と狭山が退室し、処置室には飯田と二人きり。二つのタマが、ずっと痛い。
「……タマタマを見るよ」
飯田が手を離そうとするけれど、そんなの嫌だった。ずっと繋いでいてほしい。部屋から出て行かれたらどうしよう――そんなことされないと思うのに、どうしても不安でぎゅっと握る。
「……あぁ、じゃあこのままで」
飯田が手をほどくのを諦め腕を伸ばすようにして足の間を覗き込んだ。その瞳に映るものが一体どういう状態なのか、考えたくもない。
「……いやらしい……ひり出された睾丸に針が刺さってるよ。点滴の針だから太いね。これは痛そうだ」
「うううううううううう！」
わざわざ言わなくていいのに。つい想像してしまって痛みが増す。
「でもすごく……本当にいやらしいよ。痛いのに……希望を叶えてくれてありがとう」
「うううっ……」
希望、と言ったのか。ということは、これは本当に飯田の願いなのだ。ならやはり――耐えなければ。
「うううっ！　うううっ！」
でもこれが一時間続くとなるとつらい。それに息も苦しい。せめてボールギャグは外してほしい。
「……あぁ、口を楽にしようか。一時間口を開けっぱなしはつらいね。これ以上痛くなることはないけど、舌は噛まないように気を付けて」
飯田が頭に手を伸ばした。頑張って後頭部を浮かすと、ベルトが外され呼吸が一気に楽になる。
「っは……痛いっ……痛いよおおっ！」
「うん、痛いね。見ていてもとても痛そうだよ」
「やぁっ……」
「でもたくさん射精し続けるところが見たいんだ」
「見たいっ？　僕のしゃせえ、麻斗さん見たいっ？」
「あぁ、見たいよ……」
流れる涙の量が増えた。瞬きをする度に零れていた涙は、もう瞼を動かさなくても次々流れ落ちていく。涙のせいで、耳が痒い。
「うううっ……頑張るっ……頑張るからぁ……」
だから何、ということもない。強いて言うならば、そのときはちゃんと射精を見ていてほしい。一度たりとも目を離さずに。

「うん……嬉しいよ。愛してる。律、可愛い」
頭を撫でられ、その手がそっと耳を撫でる。痒いところを少し強めに撫でてもらえて気持ちいい。
「んっ……」
「ん？　耳気持ちいい？」
「涙で痒くてっ……」
「あぁ……お顔を拭こうね。鼻水も吸おうか」
「やっ……やだぁ……」
もう鼻水を吸い飲まれるなんて嫌だ。
「どうして？　とても可愛いよ。赤ちゃんみたいで」

〜〜〜〜〜

博物館の展示フロア。その、展示コーナーの前で次の客を待つ。
「この展示品は？」
「こちらは中途不良のペニスです」
接客の基本、笑顔での対応。
「中途不良？」
「はい。当初は正常に機能しておりましたが、激しい責めにより不良品となったペニスでございます」
「ほう……一体どう壊れているのかな」
「こちらの展示品のペニスは尿も精液も垂れ流しの状態です」
「垂れ流し？」
「はい、本来は刺激して絶頂することで射精がされますが、このペニスは射精機能が壊れておりまして、精液ができたそばから勝手にだらだらと漏れてしまう状態になっております」
「ほう……でもその瞬間はどうしたら見られるのかな」
「まずこちらの薬剤を睾丸に直接注射致します。すると急激に精液が造成され、数秒揉み込んだ後でこちらのボタンを押していただくと陰嚢内に埋め込まれたローターが睾丸を刺激し、精液を垂れ流すようになっております」
「それはすごいが……本当にできるのかな」
客は展示品に歩み寄り、まじまじとその陰部を覗き込んだ。
「もちろんでございます。注射は私が行いますが、お客様はどうぞこちらのボタンをお押しになってください」
客が関心を持ったのを確認し、棚から一本の注射器を取り出す。そして律の陰嚢の大きさに合わせたゴムで睾丸をひり出し、ぷりっとしたそこに躊躇なく針を刺した。途端、びくんと足が揺れる。痛いのだろう。でも、きっと律は感じている。
「痛くないのかね」
どうやら客も足の動きを見ていたようだ。少し心配そう、けれど半分は楽しそうな顔をして言った。

「激痛でございます。しかしこちらの展示品は痛覚が性感に繋がるようになっておりますので、注射の痛みはすなわち快感でしかございません」
説明ははっきりと分かりやすく。そうしながら注射器の押子を押して薬液を睾丸に流し込む。すると陰嚢は目に見えて大きく膨らんだ。
「すごいな……ぷりっとしてきた」
「はい、今展示品は何かが睾丸内を這い回るような刺激を感じていることでしょう」
それは律が自分で言っていたことだ。痛みと、そして急所である睾丸に針を刺されてしまうという興奮から息を荒げながら律は『タマタマの中動いてるっ』と言ったのだ。そして落ち着いた後で詳しく聞くと、どうやら陰嚢の中を何か虫が這うような、くすぐったいような感じがすると言っていた。それは恐らく急激な睾丸の活動によるむず痒さだろう。
「では薬剤を揉み込みますので少々お待ちください」
ここに来る客はただ金を持っているだけの変態ではない。それなりに心にも余裕のあるタイプなので、例えば展示品が粗相をしても怒るようなことはないし、こうして待たせても「待つ楽しみ」を心得ているような人間ばかりだ。
陰嚢につけたゴムを外し、それから両手でやんわりと揉み込む。律の興奮が高まるように、少しだけ睾丸を潰すように力を込めながら。
「お待たせ致しました。ではボタンをどうぞ」
男は鷹揚に頷き、そして設置されたボタンを押した。
律の足が、注射針を刺したときのようにびくんと動く。そして聞こえるヴヴヴヴヴというローターの振動音。
「今陰嚢内部のローターが動いております。ご確認いただけておりますか」
「あぁ、可愛らしいタマが震えているのがよく分かるよ」
男は楽しそうに陰部を眺めた。そして一分もすれば勃起したペニスからたらりと白濁が零れ落ちる。それを見て、興奮した顔でこちらを振り返った。
「これはすごい！」

4万6千文字。ずっとハードエロです。